

令和3年度 奨励研究 調査研究報告

ニセコ町における食と観光資源の多様性に関する研究

札幌国際大学

目 次

I 研究概要

- 1 研究の目的
- 2 研究組織
- 3 研究の方法・実施計画等

II 調査研究の内容

- 1 ニセコの食文化に関する調査研究
担当者 池ノ上 真一
- 2 ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究
担当者 藤崎 達也
- 3 ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究
担当者 杉江 聡子

III 成果と課題

IV 資料

I 研究概要

1 研究の目的

ニセコ町は国の「SDGs 未来都市」に選定され、『北海道ニセコ町 SDGs 未来都市計画』には 2030 年のあるべき姿として、観光の質の向上、目的税の創設など地域循環・還元する観光業、農家レストランや直売所の新たな展開など環境と調和した農業、そして国際化を前向きに捉え有島武郎の遺訓「相互扶助」を礎とした社会、住民自治意識の高い地域の実現が挙げられる。しかし、現状では国策に沿った政策理念が先行していると感じられるため、今後は具体論を明らかにすることが課題である。

そこで本研究では、ニセコ町との包括連携協定に基づき、ニセコ町における持続可能な観光の実現に寄与するため、ニセコにおける観光発展の経緯と課題を明らかにすると共に、地域特性を生かした持続可能な観光の具体方策について検討した。特に今年度については、北海道でも先駆的に展開してきたニセコエリアのアウトドアビジネスの発展経緯、自然環境と人の関係により形成される農村地域における食文化や食産業がグローバル化の中でどのような展開を見せているか、そして、インターナショナルスクール設置や国際交流員配置をはじめ先駆的に異文化コミュニケーションに取り組む当地において、外国語の新たな教学モデル構築を目指した授業設計と教授法を検討した。

2 研究組織

本研究は、3つのテーマについて以下の者が担当する。

(代表) 観光学部観光ビジネス学科 教授 池ノ上 真一
「ニセコの食文化に関する調査研究」

観光学部観光ビジネス学科 准教授 藤崎 達也
「ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究」

観光学部国際観光学科 准教授 杉江 聡子
「ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究」

3 研究の方法・実施計画等

2で前述した研究の目的を達成するために、具体的には、次の3つの研究プロジェクトに取り組んだ。また実施においては、ニセコ町役場をはじめ、地域関係者と連携すると共に、観光学部の学生の学びの場としても活用した。

1. ニセコの食文化に関する調査研究（池ノ上）

かつて農村として形成されてきたニセコであるが、近年はグローバル化が進み国内外からの移住者が増加している。また、飲食店や食料品店等の品揃えについても、札幌と比較しても多様な食文化を垣間見ることができる。そこで特に本年度は、近年増加傾向にあるニセコの伏流水や土、風や太陽といった自然環境を利用する醸造所・蒸留所に着目し、地元の旅行業者や食関連事業者と連携した調査研究を実施した。

2. ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究（藤崎）

北海道ではアウトドア事業が盛んであり、30年前ごろから本格的にビジネス化が進められてきた。その中で、同様の時期に立ち上がったニセコの事業は、独自の発展を進んでいると考えられる。それはこれまで外国人経営者の感覚による独特な事業センスで語られてきたところであるが、一方で多くの日本人経営者も活躍しており、実態が十分に把握されていないためである。そこで、知床等における事例に詳しい藤崎がインタビュー及び対談を行うことにより、ニセコと他地域を比較しながら、何が同じで何が違い、これからの北海道観光において応用可能な点について元同業経営者としての視点から概観した。

3. ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究（杉江）

伝統的に第二言語習得では、母語話者を理想像として伝統的な言語知識や運用技能の習得を目指すことが志向されてきた。しかし、日本の社会構成や外国語教育環境を考えると、ICTや様々な学習リソースを活用しながら「第二言語話者としての一定レベル」に到達することを目指し、学習の過程で適切に学習意欲のデザインを考慮し、自身の文脈で自分のことばを語れるようになることが重要である。とくに世界的に言語内容統合学習（CLIL）やCBI（Content-Based Instruction）の潮流があり、外国語に直結する要素だけでなく、学習者の関心や専門を最大限に活かす学習活動を展開することが必要である。そこでニセコの観光資源の多様性の理解をとおり、第二言語習

得に関する学習活動をデザインし、教育実践を通じて、教授設計を評価することを目的とした。

○実施期間

令和3（2021）年10月1日～令和4（2022）年3月31日

○協定先

ニセコ町（連携協定 有）

○協定名称

ニセコ町と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の包括的連携に関する協定

○研究経費総額

1,003,000 円

II 調査研究の内容

1 ニセコの食文化に関する調査研究

担当者 池ノ上真一

(1) ニセコと発酵

当該調査研究は、「ニセコ町と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の包括的連携に関する協定」（以下、連携協定とする）を締結したニセコ町をはじめ、蝦夷富士の名で親しまれる羊蹄山（日本百名山）と、主峰・ニセコアンヌプリなどで構成されるニセコ連峰を抱く倶知安町と蘭越町の3つの自治体を対象とした。この3つの町を合わせたニセコエリアの面積はおよそ900km²で、大阪府の半分近い面積である。

この地域の特徴としては、世界的スキーリゾートとしてニセコアンヌプリなどが有名である。パウダースノーと呼ばれる世界的にも上質な雪質により、オーストラリア人をはじめ多くの外国人が訪れるため、外国にいるような風景を見ることが出来る。特に、倶知安町のひらふ地区などでは、国外の企業や投資家によるコンドミニアム建設ラッシュが見られ、都市化に伴う地価の上昇など変化の大きな地域である。

気候としては、国による「特別豪雪地帯」に指定され、スキーリゾートとして十分な環境を持つ。他方で、春から夏にかけては温暖で晴天の日が多く、山の上では冷涼なため、避暑地としても最適な環境である。そのため、夏はラフティングやゴルフなどのアクティビティも盛んで、清流日本一にも選ばれた尻別川があり、サケやマスが遡上するなど、山岳リゾートとしての発展も見られる。さらに、羊蹄山は活火山であることから、湯元・昆布川・新見・五色など10余りの温泉が点在しており、泉質は白濁した硫黄の湯から、透明感のあるナトリウム泉と多彩に揃っている。

このエリアにおける人との関わりについては、旧石器・縄文時代から見られる。しかし、尻別川の流れが急なこともあり、アイヌ民族を含め、居住エリアではなく、狩猟の場であったと言われている。居住が進んだのは近世からで、1890年頃から本格的な移住が行われた。

そのような環境のもとで、発酵文化の展開が進んでいる。大正5（1916）年創業の二世古酒造をはじめ、クラフトビールやワイン、ウイスキー、ジンジャービアなどを醸造・蒸留する事業所、チーズや生ハム・サラミ、ピクルスなどの発酵加工品を製造する事業

者などが数多く展開している。ひとつのエリアで、日本酒、クラフトビール、ワイン、ウイスキー、ジン、ジンジャービア、チーズ、発酵加工品などの多種多様な展開が見られる地域は、全国的にも希少である。

(2) 活動内容

そこで、近年増加傾向にあるニセコの伏流水や土、風や太陽といった自然環境を利用する醸造所・蒸留所に着目し、地元の旅行業者や食関連事業者と連携した調査研究を実施した。具体的に今年度は、以下の活動を実施した。

○目的：

ニセコエリアにおける発酵業界の現状把握、およびニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げを支援すること。

○体制：

ニセコ発酵ツーリズム推進協議会（代表・水口渉）と連携した調査研究を実施した。

ニセコ発酵ツーリズム推進協議会は、発酵をキーワードにニセコ地域の食品・飲食・観光事業者などの有志メンバーにより、2021年に設立された。ニセコ地域の新たな楽しみ方としてツーリズムやイベント等を提案することを目的とする。

○フィールドワーク：

学生を伴ったフィールドワークを以下のとおり実施した。

▽1回目：7月25日(日) 学生7名参加

・概要：

最初のフィールドワークとして、池ノ上ゼミの学生7名とともに、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の初期立上げメンバーの事業所を訪問し、現地調査を実施した。



まずは、醸造家である高浩一氏の案内でクラフトビールを製造販売するルピシアを訪問し、工場内で醸造の現場を案内してもらった。高氏の詳細な解説がとても分かりやすく、醸造について初心者であった学生も十分に理解することが出来た。



次に、日本酒の八海山で知られる八海醸造がウイスキーやジンをつくるニセコ蒸留所を見学した。まだグランドオープン前であったが、特別に所長自ら案内して頂いた。観光にも対応した洗練された施設や品揃えがとても印象的であった。



そして次に訪れた高橋牧場では、店長の高井裕子氏に牧場や店舗、観光客への対応の状況等について説明頂いた。ニセコ町内でも、牧場の風景はもちろんのこと、羊蹄山が一望できる絶好のロケーションのため、人気の観光目的地となっており、コロナ禍にも拘わらず、比較的多くの観光客が訪れていた。



最後に訪れたのは、倶知安町にある二世古酒造である。当該酒造は大正5年創業の老舗で、当時から続く酒蔵の建物で現在も営業を続けている。伝統的な手法を継承しながらも、最新の技術を取り入れ、さらに時代に合わせた味や商品展開に取り組む杜氏・水口渉氏の具体的な取り組みや熱意が伝わる案内であった。



▽2回目：11月6日(土)～11月7日(日) 学生29名、大学院生11名参加

・概要

2回目のフィールドワークは、池ノ上ゼミ生だけでなく「リゾート概論」の履修生や、大学院の「観光産業・事業研究演習」の履修生を加えたメンバーで実施した。2回目のテーマは、マップ制作のための情報収集であった。そのため、地域魅力再発見班、アクティビティ開発班、情報発信班の3グループに分かれ、それぞれの観点からフィールドワークを実施した。ニセコ発酵ツーリズム推進協議会メンバーへのインタビューや食の体験、動画撮影等を行った。



また、情報発信として、地元のコミュニティ FM であるラジオニセコの公開生放送「ニセコラジオカフェ」に出演し、学生が活動内容やニセコの感想等の話しをした。概要はその他の欄に掲載する。

また、合わせてニセコ発酵ツーリズム推進協議会のメンバーの集まりにも参加させて頂き、マップ制作の打合せや協議会の目的の確認や今後の発展方針に関する意見交換をするとともに、関係者間の交流を深めることが出来た。

▽上記以外についても、当該企画やフィールドワーク、マップ制作等に関する打合せや個別調査を適宜実施した。

○その他

・情報発信

ニセコ町との包括連携協定締結の際、コミュニティ FM・ラジオニセコの宮川氏と意見交換をさせて頂いた。そこで、学生の活動について、町民への周知や情報共有のためにラジオ出演についてお誘いを受けていた。そこで、ゼミと授業のフィールドワークを実施した 11/6 にグループ毎に出演をさせて頂いた。以下のとおりである。

11月6日(土)12:30~13:35

ラジオニセコ公開生放送「ニセコラジオカフェ」出演

3組 10名

○12:30~12:45

出演者：米坂 守人、肖 迪、中井 晴大

札幌国際大学池ノ上ゼミ（2年生）

トーク内容：ニセコ発酵ツーリズムマップ制作（情報発信チーム）

○12:45~12:57

出演者：王 芸君、杉本 響、王 嘉琦、戴 博深

札幌国際大学大学院「観光産業・事業研究演習」履修生

トーク内容：中国人留学生から見たニセコ

○13:20~13:35

出演者：松岡 亜紀、品川 愛樹、大谷 円香

札幌国際大学「リゾート概論」履修生

トーク内容： 大学生が見たニセコのイメージ



・マップ作成


前述したとおり、マップ作成の目的は、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げであった。具体的には、コミュニケーションの円滑化と関連情報の収集と編集、一覧できるツールとしてのマップ制作である。利害関係の少ない学生によるフィールドワークをきっかけとし、関係者が交流し、協議会の目的の確認等をおこなってもらうことを意図した。

また制作について、学生はもちろんのこと、当該協議会メンバー、制作協力者としての小川基氏（アイヌデザイナー）、中根宏樹氏・中根萌氏（ライター・デザイン）らで取り組んだ。

(3) 活動成果

今年度の活動の成果としては、前述したとおり、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げ、情報の発信、マップの制作を達成した。


以下に制作したマップを掲載する。そこに当該協議会メンバーの一覧、地理情報等を掲載した。また制作に関しては、北海道遺産協議会の WAON 助成も活用した。



**NISEKO
HAKKO
MAP**

ニセコ発酵ツーリズム推進協議会
Niseko Fermentation
Association

ニセコの発酵家



赤石 泰洋
シャールキュトリー アカイシ
ニセコ町 栗原 11-26
090-2072-2666

「食べる」を彩り、豊かにする。その特別な瞬間のために時間をかけて、素材の持つおいしさを引き出します。長時間熟成した生/ハムやサラミ、チーズ/チーズを誇るパテやレバーペースト、ピクルスなどのフレンチデリをお楽しみください。

水口 涉
二世古酒造
倶知安町 旭47
0136-22-1040

大正5年創業。加水調整をしない原酒、水、空気、樽桶にこだわる蒸酒。ニセコワイズ山形の雪消水と、羊蹄山の「醸出し湯水」を使用しています。また、全銘柄で醸造酒米を100%使用。この地、この蔵ならではの味わいを生み出しています。

矢吹 彰子
羊蹄山麓ビール工場
ニセコ町 羊蹄山麓 6
070-2182-3437

世界のお茶の専門型ルビシアの頂に調するブランドルビシア「グールマン」によるルビシア「羊蹄山麓ビール」。ニセコの清涼と醸造家のこだわりから生まれた、新世代のグールマンのためのオリジナル・クラフトビールです。醸造過程にこだわった新鮮なビール本家のおいしさをご覧ください。

近藤 裕志
ニセコチーズ工房
ニセコ町 羊蹄山麓 425番地 6
0136-44-2188

世界コンテストでスーパーワールドを受賞した「二世古 鹿 Tomiiji」、国内コンテスト、フルーチーズ部門で優勝した「二世古 空 [we]」など、羊蹄山の生乳を使った、国内外コンテストで多数受賞したチーズがお楽しみいただけます。

鈴木 隆広
ニセコ蒸溜所
ニセコ町 二セコ478-15

保冷材に換け込むようにたたく自家製小麦酒。ニセコアツタブリの良質な仕込みを使用し、大麦夏芽などを原料とするモルトウイズキーを主原料としています。原料試飲が楽しめるパークラウンジのほか、ワイスキーのように時間の経過とともに風味が深まるような工程の醸造も。

服部 吉弘
LaLaLa Farm
ニセコ町 羊蹄山麓 68-1
090-2262-3814

目に響かないミネラルを呼び込んで物事を変化させる「発酵」の法則を体感し、自然を壊さない持続可能な農産物あり方を提供する山さな農場です。精製された空気を、農産物の差が表れるようになった環境を感知し、食べ手が笑顔になれるよう思いを込めて野菜を育てています。

長島 昌志
Black Fox Beer
倶知安町 北3条 3丁目 15-1
0136-55-8919

北海道産の醸造所。DIYでつくられた醸造所は、醸造者が選べる空間で、特にドラム缶から加工した醸造所。醸造者の原料にこだわりの手回し時間をかけて醸造するのは、一味違った「ONLY ONE」なクラフトビールです。

櫻井 繁
ニセコビール醸造所
Niseko Brewery
ニセコ町 本通 4-11
0136-55-5664

2013年に創業した。ニセコ町で唯一のクラフトビール醸造所。小規模ながらこだわりの新鮮なシビレで、世界的ビアコンペでも入賞を数回。醸造所2階には、ニセコ産の絶品がはびかるブルワリーカフェバーが併設されています。

遠藤 威
ニセコ高橋牧場
ニセコ町 羊蹄山麓 88-1
0136-44-3734

牧場に使用している牛乳は、ニセコ産の牧場からしぼりたてを搾り、臭いを取り、殺菌された牛乳を搾り、食卓まで届ける。新鮮な牛乳を搾り、食卓まで届ける。新鮮な牛乳を搾り、食卓まで届ける。

本間 泰則
ニセコワイナリー
ニセコ町 羊蹄山麓 194-8
0136-44-3099

羊蹄山の産で原料となる有機ブドウを栽培し、醸造する醸造所です。ブドウのワイン加工している小さなワイナリーです。醸造に使うのは、自家製のブドウです。醸造に使うのは、自家製のブドウです。醸造に使うのは、自家製のブドウです。

前田 伸一
HAKKO GINGER
倶知安町 岩尾 44-55
0136-25-4730

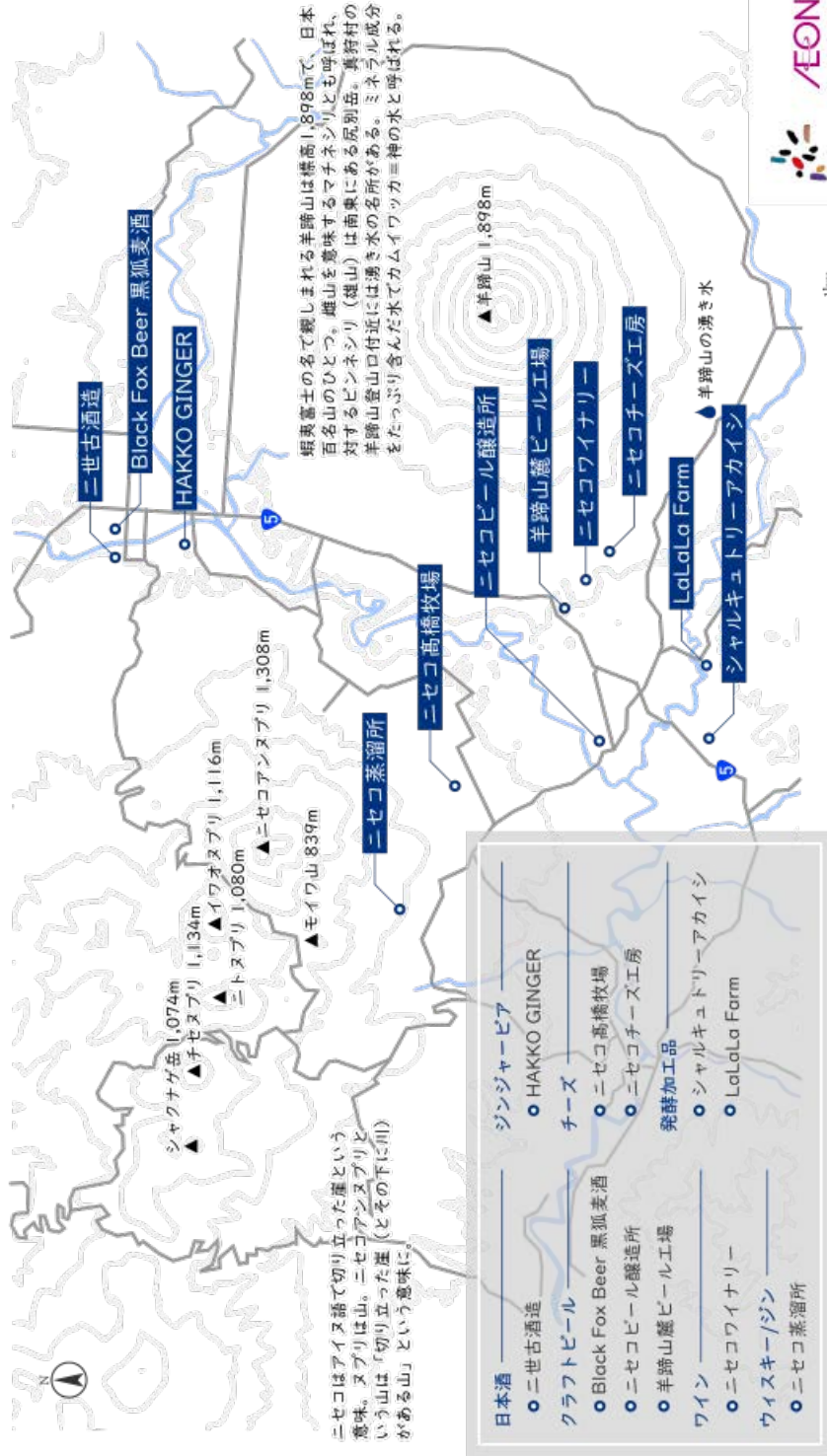
本物を味わって欲しいという想いから生まれた、日本初の自社製ジンジャービール。生姜、レモン、唐辛子など国産有機材料と、こだわりの高い酵母で発酵させたヘルシードリンクです。

このマップはデザインを無償で提供した「ほっかいどう遺産財団」の協賛により制作しました。

NISEKO HAKKO MAP

ニセコ発酵 Niseko Fermentation Tourism

札幌を拠点にアイヌ文化を発信する ToyToy 屋が手がけたアイヌ文様のロゴ。ニセコの山の神々の連なりにも見え、温かなつながりへの願いが込められている。



また、北海道新聞の後志版（2022年1月5日）でも当該協議会の発足について報道されたので記事を掲載する。

2022年(令和4年)1月5日(水曜日) 16版 総合 2

新風 北の美酒

第3部 新時代を開く ④

サミットで採用

岩見沢市のロワイナリー代表のブルース・ガットラフさん(68)は昨年11月、取締役を務める栃木県足利市の「ニコ・ファーム・ワイナリー」を訪れた。トウモロコシの収穫に励む山田孝夫さん(68)に相変わらず、完結した作業だね」とほほ笑んだ。

ニコ・ファームは協議会

障害者も共に地域に貢献

支援施設「こころみ学園」の保護者が出席して、約100人が集わった。池上知恵子専務(71)は、障害のある人もない人も、やがて特別支援学校だった故郷の酒を復活させるのが、私達の役割と語る。池上専務の父で中学校の教員だった池上誠一(88)は、酒造りの経験が豊富で、酒造りに関する知識が豊富だ。池上誠一は、酒造りの経験が豊富で、酒造りに関する知識が豊富だ。

川田昇さんが、酒造りの経験が豊富で、酒造りに関する知識が豊富だ。

武井保則会長(68)は「ニコ・ファームのおかげで、地域の酒造りにも足を進んでほしい」と話す。

道内でも、酒造りで障害者の雇用を増やす動きがある。上川管内鷹栖町の社会福祉法人鷹栖共生会が運営する障害福祉サービス事業所「こころみ」だ。2016年からワイン用ブドウを本格栽培。同管内から通う知的障害者13人が育てたブドウの枝を運び、定めたブドウの枝を運び、越冬のため枝に雪をかぶせる作業を担う。ワイン醸造は現在、ガットラフさんの指導のもと10月に行っているが、24年に自社ワイナリーを稼働させる計画だ。

鷹栖共生会はワイナリー運営から仕事を支える「ブレイク」の施設をワイナリーに併設した。

さらに後志管内倶知安、ニセコ両町では昨年、ユニークな団体「ニセコワイナリー」が設立された。協議会が設立して運営するのが目標で、谷敏彦施設長(54)は福祉、雇用、観光のすべてで地域に貢献できる施設になりたい」と強調する。

幅広い関連産業

酒造りは原料を栽培する農業や加工・販売、飲食業と産業の幅が広く、地域活性化や観光振興の手段になり得る。ワイナリーもその一つで、今冬、札幌と後志管内仁木町のワイナリーを結ぶ日帰りバスツアーの実証運行が進む。檜山管内上ノ国町は、休閑を業としながら仕事を支える「ブレイク」の施設をワイナリーに併設した。

さらに後志管内倶知安、ニセコ両町では昨年、ユニークな団体「ニセコワイナリー」が設立された。協議会が設立して運営するのが目標で、谷敏彦施設長(54)は福祉、雇用、観光のすべてで地域に貢献できる施設になりたい」と強調する。

酒造りは原料を栽培する農業や加工・販売、飲食業と産業の幅が広く、地域活性化や観光振興の手段になり得る。ワイナリーもその一つで、今冬、札幌と後志管内仁木町のワイナリーを結ぶ日帰りバスツアーの実証運行が進む。檜山管内上ノ国町は、休閑を業としながら仕事を支える「ブレイク」の施設をワイナリーに併設した。

食と観光 ◆ 本紙創刊 80周年

(4) 今後の課題

当該調査研究は、ニセコの食文化を探求することを目的として企画した。今年度は、水と緑が豊かな山岳地域であるニセコ地域の特徴的な食文化である“発酵“に着目した。そして、研究目的の単なる情報収集ではなく、大学と地域との連携の良さを活かすため、今後のニセコ地域でのツーリズムの発展やまちづくりへの展開を意図し、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げの支援に取り組んだ。

ただ、コロナ禍もあり、当該協議会と学生との十分な交流機会を設けることが難しかった。また、調査研究としても当初の目的を十分に達成したわけではない。ニセコの発酵文化については、現状の列挙に留まったため、なぜ発酵文化がこれだけ展開しているのか、観光や商品といった商業展開はもちろんのこと、郷土食としての現状や課題の把握など、より深掘りすることが今後の課題である。また、当該協議会の活動を支援する上で、それらの情報を共有し、活動への活かし方についても一緒に検討することが出来ると良いと考える。さらに、発酵文化以外のニセコ地域の食文化についても明らかにすることも重要であると考えている。

謝辞

本研究の実施にあたり、ニセコ町との連携にご尽力を頂いたニセコ町教育長の片岡辰三様、研究企画と連携体制、およびフィールドワークにご協力頂いたニセコ町商工観光課課長の齊藤徹様、同主幹の高橋葉子様、コロナ禍にも拘わらずフィールドワークにご協力頂いたニセコ発酵ツーリズム推進協議会（代表・水口渉様）の皆さま、情報発信にご協力頂いたラジオニセコ放送局放送局長の宮川博之様と小林愛菜様、宿泊でお世話になったモイワリゾートオペレーション合同会社（LODGE MOIWA 834）の吉村政哉様と長島佳純様、マップ制作でお世話になった ToyToy 屋の小川基様、エゾシカ旅行社の中根宏樹様と中根萌様、その他各施設の関係者やスタッフの皆様に心より深謝申し上げます。

2 ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究

アウトドアガイド育成についての研究～アイヌ文化のアウトドアプログラムへの応用とニセコ地区での実装に向けた考察

担当者 藤崎達也

1.経緯

北海道観光におけるアウトドア事業の活動は全国に比べて活発ということが出来る。その中でもニセコ地区は特にガイド事業者の数やプログラム数も充実しており、北海道のアウトドア観光の先進地と呼ぶことができると思われる。

一方その歴史は浅く、90年代の後半から北海道各地にアウトドア事業者が生まれ現在に至っている。ニセコ地域も例外ではなく、特にオーストラリアから移住したロス・フィンドレー氏のNACが牽引したと言えるが¹、同時代に立ち上がった新興の事業と呼ぶことができる。筆者も98年に知床にアウトドア事業を立ち上げ（知床ナチュラルリスト協会 shinra 1998年～）、また、北海道のアウトドア観光を支えた北海道のアウトドア振興条例に基づくアウトドア資格制度の立ち上げにも関わった。このような経験から、北海道のアウトドア事業者の多くの事業者と交流があり、経営事情等に明るい。筆者と同世代の経営者が多いことから、今後、引退や次世代への継承の時期に来ていることが想像され、経営環境に深く突っ込んだ調査を行ったところ、コロナ禍の2019年には廃業の意思を示す事業者が全体の2割いることが明らかとなった²。

現在、北海道の観光を支える切り札として「アドベンチャーツーリズム」が行政を中心に導入が進められている。しかしその担い手は脆弱な経営状態であることはこれらの調査や、事前のインタビュー等でも予想できた。観光を研究する機関によりアウトドアプログラムの作成や地域への導入などは行政等を中心に進められてきているが、現在活動している事業者へのサポートや新たな人材確保の対策が十分に行われているとは言えない。

そこで筆者は、自身のノウハウを活用しニセコ地域での新たなアウトドアプログラム開発や人材開発を検討するプロセスの中から、今後の北海道観光のアウトドア事業育成についてのオルタナティブを見出すことを構想した。特にアウトドアプログラムの盛

¹ 『北海道観光 50年の奇跡』2022.3 一般財団法人北海道開発協会

² 「アドベンチャートラベル担い手の危機」藤崎達也『観光文化』246号（2020年8月）

ん『なオーストラリアやニュージーランド、カナダなどに比べ、先住民族の文化をプログラムに反映させる取り組みが少なく、異文化交流などに日常的に関心を持つ欧米からの観光客に対して訴求力を持つコンセプトとして、アイヌ民族文化とアウトドアを捉えることとしてこの研究を始めた。

2. アイヌ民族文化とアウトドア観光

筆者は 17 年間にわたって知床を拠点とするガイドとして観光の現場に立ってきた。1998 年に知床ナチュラルリスト協会を立ち上げ 15 年間代表者を務めた。この間、2003 年には岩手県田野畑村で体験プログラムを提供する番屋エコツーリズムの立ち上げに参加するなど、日本各地でのアウトドアプログラムの開発にも関わっている。そのような中で、知床では「先住民族エコツーリズム」というものの立ち上げに関わった。

そこでは北大名誉教授でアイヌ民族の活動にも深く関わっていた小野有五先生とともに「SIPETRU/シレットコ先住民族エコツーリズム研究会」を立ち上げ、世界自然遺産としての登録が目前となっていた知床・斜里町で、アイヌ民族によるエコツーリズムを立ち上げた(2005年)。ツーリズムではアイヌ民族の伝統的な歌や踊りの紹介をするのみではなく、ハワイやニュージーランドなどでの先住民族による先進的なエコツーリズムへの取り組みを参考にし、アイヌアートプロジェクトの結城幸司氏らと具体的なツアー作りに取り組んだ³。当時知床半島は IUCN の勧告を受け世界自然遺産に登録される見通しであったが、IUCN の評価書の中には管理体制へのアイヌ民族の関与の必要性についても触れられていた。SIPETRU では 5 月、他のアイヌ民族のグループと共に環境省や IUCN などに対して、知床世界遺産管理におけるアイヌ民族の関与の重要性を訴える意見書を提出しており、IUCN の評価書はそれらの意見書を反映したかたちとなったことは、観光が単なる旅行者の案内にとどまらず、民族共生に寄与し一定の評価がされた。さらに当時 SIPETRU の調査によると知床には「チャシ」と呼ばれる先住民族の遺跡が多数現存しており、樺太アイヌや北海道アイヌといったいくつかの民族が、それらを聖地のように語り継いでいることも明らかとなり、ツーリズムの計画そのものが地域の文化再興に役立つことが分かった。

ニセコ地域においては、全国のアウトドアビジネスの参考となることから、アウトドアプログラムの開発というアプローチから地域の文化を見直し、さらにそのスピリットをプログラム自体にフィードバックするプロセスを通して、例えばアイヌ文化をモチ

³ シレットコ先住民族エコツーリズム研究会 プレスリリース

「世界自然遺産知床ー先住民族がエコツーリズムを開始します」2005.7

ーフとしたプログラムが開発されれば、全国の手本となると考えた。

とはいえ、知床での経験から、そもそもアイヌ民族として生活するアイヌ民族の人は少数であり、その上さらに観光に従事しようとなると人材は絞られ、その中からアウトドアの資質やインストラクターとしてプログラムを支えていくことは、ただでさえ人口減少の昨今において非常に狭き門であることが想像される。昨今では国によるウポポイ民族共生象徴空間が設置され、充実した集客と人材育成体制が生まれたと言えるが、アウトドアプログラムのノウハウは既存の事業者等との連携が望まれる。また予備調査を進めると、そもそもの現存アウトドア事業者の持続可能性に課題があることがわかり、本調査ではアイヌ民族のツアーに限らず北海道のアウトドア観光がおかれている状況について、ガイド事業の実情とそれを支える諸制度の課題を明らかにすることとした。

3.調査の概要

当初ウポポイスタッフとアウトドアガイドとの意見交換等を直接的に行うことも考えたが、コロナ禍で実施が不確実なため、筆者が知床時代にガイドとして雇用していた者などがウポポイでの解説員として就職していることもあり、彼らの意見をメールなどで聞き取ったり、カヌープログラム等ニセコにも関係の深いアイヌ民族に伝承される技術にまつわる聞き取りなどを関係者から行うこととした。そこで、特に①新たなカヌープログラムの導入に関すること②新たなアウトドア人材の育成プログラムに関することを、カヌーの専門家や制度設計を担うコンサルタントなどに対談・インタビューを行うことにより明らかにした。

<対談・インタビューを行った専門家>

■井尾 文継 氏

職業 株式会社スポーツジョイ 代表取締役

大分県大分市出身。大分県内でのカヌー競技第一人者。地元大分にて学生時代を過ごし、高校卒業と同時に広島大学に進学。その後稼業を継ぎスポーツの推進とともにスポーツツーリズムに携わる。アウトドア用品の開発販売を手がけることから、最新のアウトドア事情に詳しい。さらに大分県のアウトドアガイド資格制度の研究会を立ち上げ、北海道の事例を客観的に調査している。

■板谷 貴文 氏

個人事業「ダイビングショップ・オーシャンデイズ」から (株)オーシャンデイズ設

立。代表取締役。支笏湖地域を中心にカヌーやダイビングなどのアウトドアプログラムの展開を手がけている。

■酒本 宏 氏

株式会社 GLOCAL DESIGN 代表取締役 人口減少社会のまちと暮らしのデザインをテーマにするまちづくりプロデューサー。観光まちづくりや地域コミュニティの活性化・再生、エリアマネジメント、地域ビジネス、シビックコミュニケーションなどを手がける。北海道のアウトドア資格制度を運営する北海道アウトドア協会事務局の草創期を担う。

■小林茂雄 氏

南富良野まちづくり観光協会の小林茂雄理事 (有) ビーバーカヌー代表取締役
北海道で本格的なアウトドアビジネスを定着させた然別湖ネイチャーセンター初代スタッフ。OLD TOWN カヌーの輸入代理等を行う傍ら、カナディアンカヌーのセルフビルドを北海道に定着させ、数多くのカヌービルダーを育成した。アイヌ民族をはじめとする先住民族のカヌー文化にも明るく、将来のアイデア等を伺う。

4.井尾 文継氏×板谷 貴文氏

日時：2022年3月10日

場所：支笏湖 (株) オーシャンデイズ事務所他

内容：支笏湖のバイカモを観察しながら SUP 体験ができるように、透明な SUP を制作開発した板谷氏のツアー造成や SUP 開発のビジネスの裏側を伺うことにより、ニセコや周辺地域でのアウトドアプログラム開発におけるヒントや課題を抽出する。ボイスメモをとり筆者がまとめたものである。

4.1.アウトドア事業の現況について

コロナ禍を受け外国人旅行者などは激減したが、実は 2021 年度はコロナ前よりも売り上げが向上している。事業規模としては 5,000 万円程度だが、最高益を予定している。これは、コロナ禍により近場のアウトドア需要が増え、札幌圏からの旅行者に動きが見られたことや、かねてより取引を続けていた各旅行会社からの支援によるところが大き

いとのこと。

4.2.アウトドア事業の人材継承について

他地域と同じく人材の確保には苦勞をしており、学生向けにアルバイトを募集するなどを行なっている。また昨年より北大と連携してのインターンシッププログラムを導入している。観光産業はトップシーズンに売り上げが集中することもあり、労働環境はお世辞にも良い状況とはいえない。しかし、特にガイド業は毎日お客様の笑顔に触れることができ、観光という楽しむことを目的にくる接客業はサービスが好きな若者にとっては最適な仕事だと信じている。例えば優勝のインターンシップなどで、トップシーズンのガイドを体験することにより、将来はフリーガイドとして副業として観光に関わるなど可能性が広がると考えている。以前はいわゆる「丁稚奉公」や「経験を積む」というプロとして活躍できない期間は、本人の修行の段階であるという認識があり、それも許される風潮があった。他にもガイドが地域に根ざし、地域の文化継承の担い手になるなど、地域の空気感を纏うことが重要であり、そのような育成スキームを作ることができないか試行錯誤している。

しかし、法人としてできることは給料体系やさまざまな福利厚生を整備などであり、まして起業をすとなれば、家庭の大黒柱になる気概が求められる。現状では行政の補助事業で食いつないでいるような事業者も多くプロ意識が育ちにくいと危惧している。

4.3.行政等によるアウトドア振興に関する感想

北海道ではアウトドア振興条例を作りアウトドアガイド制度を創設したが、実質的に機能していない。現状ではガイド個人を育成する資格制度という意味合いが強く、そもそもガイド事業自体が根付いていきにくい状況。また、地域に根ざした自然や文化を扱うという性格上、事業者が一般的な地域活動から一步踏み込んだ存在として期待されていることを捉え直す必要がある。例えばPTAや自治会活動といった地域活動をガイド事業者の若いスタッフが担うことにより、カヌーの降り場周辺の除雪や、事故の際の相互扶助といった地域で担わざるを得ない役割に対して理解を得ることができる。さらに、外部から利用だけで入ってくる事業者には地域の人々からの冷ややかな目があるが、地元の事業者が中心となってそれらも含めたルールなどが根付いていくことが今後重要になる。筆者がガイド事業を始めた20年前はそのようなことを自然と行っている事業者が多かったが、最近の若いガイドには自覚が少なくトラブルも多い。最近では気軽にツアーの形やお金になるということで簡単に始めてしまう。

4.4.明文化されていないようなローカルルールの遵守とそのアイデア

例えば沖縄のガイド事業者などはみさきごとにある祠の意地清掃などを地道に行う事業者が理解されて、結果売り上げも上がっている。自然を借りてビジネスをする以上そのような姿勢は重要だが、明文化されたルールではないだけに浸透しない。

それは文化面でも言えると同時に、例えば保険の補償額や地域の自然保全活動など、定量化しにくい活動を行政等の制度で引き上げる工夫を求める。以前は旅行会社がそういったガイドの資質を見極めてきたことがあったが、インバウンドブームで参入がしやすくなり、ICTの普及により商売もしやすくなった反面、無法状態といっても良い状況。

地域での保全活動などについては、例えば基金をきちんと創出して「事業者は年間〇〇円の積み立て」といった分かりやすい制度も必要である。支笏湖の場合は国立公園なので保護と利用の枠組みの中で検討中。お金を払ってでも楽しんで地域の自然を守りたいという旅行者を増やし負担をしていただく仕組みを作るべき。単純に利用する自然を地域で借り上げるなどやり方はあるはずだ。

<制度を検討するとしたら>

次のような評価基準を盛り込むなどのアイデアが考えられるのでは・・・

- ・ 鮎釣りなど地域の清掃活動などで協力し合う仕組みなど
- ・ 法人か個人か地域の観光連盟や警察消防に届出がある
- ・ 他の事業者に声かけをしやすい仕組み（ガイドステーションなどの整備）
(支笏湖に出入りしている事業者の数約30事業者)
- ・ 資格を発行することでお墨付きを与えることでガイドに免罪符を与えるわけではない
- ・ 人気の景勝地は利用できる事業者やガイドをセレクトできるような仕組み
- ・ 入れる場所は自治体や地域などで買い取って有料にするなど

5.井尾 文継氏×酒本 宏氏

日時：2022年3月11日

場所：(株) グローカルデザイン事務所

内容：北海道アウトドア資格制度の立ち上げ当初の話を伺うことにより、アウトドアプログラムスタートアップの際のさまざまな障壁について調査。90年代と現在との違いを考えながら、今行う際の課題を抽出する。

5.1.KITABA がアウトドアや観光に関わるきっかけ

まちづくりのコンサルタントとして活動していて、各地の自治体から依頼されて観光コンテンツを作るなどをしていた。たまたまアウトドア協会を作った時も道庁から依頼。しかし、アウトドア振興条例やアウトドア資格の制度設計事態がスタート時から様々な問題を抱えていた。それは例えば次の通りである

- ・資格取ったからといってガイドにとって何のメリットもない。試験も研修も受けてもアウトドア協会のホームページで紹介される程度。

- ・制度自体が民間で自走できる状態ではなかった（保険の仲介料収入等独自財源を作ることが難しかった）

そこで、当時のアウトドア協会は研修の実施、試験の実施といった北海道からの委託事業に集中し、プロモーションとガイドのバックアップに徹した。それによって、観光産業の中でのガイドの底上げには役に立った。

一方、当時は旅行会社が旅行商品の流通を担っていたが、旅行会社はどこのガイドが受かったか？が気になるものの資格がなくても安いガイドに契約が流れるという現実があった。資格がなくても営業できることはそもそも問題だと感じた。

5.2.北海道アウトドア資格制度の枠組み

当時は伏島先生などを座長とし地域政策系の事業として進められていた。知事の直轄事業であった頃は知事に直接意見はできたが、政権が移譲しそこら辺がうまくいかなかったことを覚えている。また制度の作文自体は行政が中心となって作ったため、ガイド業・ビジネスを盛り上げるという視点には欠けるものであった。ニュージーランドのようにガイドがいないと観光ができないという仕組みにつなげることが必要と感じた。

当時、ニュージーランドの QUAL マークという品質保証を提案したが、そこでは研修主催団体として収入がしっかりしており、持続的に運営されている。

6.まとめ

板谷氏のヒアリングでも述べられている通り、アウトドア事業はもともと地域の資源をいわば「無料で」拝借しビジネスにしているという性格がある。そのため、その資

源の保全に関わろうとする態度を、実際に保全に関わっている行政や地域のコミュニティから求められている。一方、行政によるルール化では北海道では「北海道アウトドア振興条例」に基づく、北海道アウトドア資格の制度があるにもかかわらず、様々な問題が浮き彫りとなった。また、ガイド事業者に求めることとしてユニークな点は、筆者も当時制度設計に関わる中で、地域の祭りや文化を十分に理解し支えるという姿勢が求められることだ。その点、アイヌ民族の文化をツアーとして育てていくに際しても同じことがいえ、今回はコロナ禍での広範な調査ができなかったこともあり、アイヌ文化をプログラム可する際のアイデアとして、文化を支える人々とともに作り上げるカヌープログラムのあり方を提言する。

北海道におけるアウトドア黎明期から今までを知る小林氏より下記のような可能性をサジェストいただいた。それは、アイヌ民族やアウトドアガイド事業者等が連携し意味のあるトレーニングを行える体制を構築することによって実現が可能と考えられる。今回のインタビュー等で得た知見を活用し今後プロジェクトとして推進体制を検討したい。

例えば、下記のようなプログラムを実施することと、調査対象の方がおっしゃっていた「地域の伝統的な文化」「コミュニティ」「ガイド育成」という視点を組み合わせたプログラムが可能と考える

<アイヌ文化のアウトドアプログラム創出プロジェクト>

「アイヌの本物の丸木舟のレプリカ制作と長距離漕行」

「タイムカプセルから本物の丸木舟を呼び出す」--勇払原野から出土した丸木舟の原寸採寸。

「ストリップカヌー工法(細い板と FRP)による丸木舟のレプリカ製作」--重さも推測により再現する。

「実際に丸木舟が漕げるアイヌ探し」--ポロト湖白老アイヌ、塘路湖のアイヌ土佐良範さん

「櫂、棹づくり。パドリング、ポーリング、ポーテージ(担いで移動)練習」

「太平洋から日本海へ」--太平洋-ウトナイ湖-美々川-千歳川-石狩川-日本海への長距離漕行。⁴

⁴ 「ムカルさんへの伝言」小林茂雄 2021年



板谷氏と井尾氏の対談(2022年3月12日)



丸木舟と近い操法の SUP (筆者)



伝統的な丸木舟を操るムカル氏
(2019年ウポポイ)

3 ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究

担当者 杉江聡子

研究計画概要：

伝統的に第二言語習得では、母語話者を理想像として伝統的な言語知識や運用技能の習得を目指すことが志向されてきた。しかし、日本の社会構成や外国語教育環境を考えると、ICT や様々な学習リソースを活用しながら「第二言語話者としての一定レベル」に到達することを目指し、学習の過程で適切に学習意欲のデザインを考慮し、自身の文脈で自分のことばを語れるようになることが重要である。とくに世界的に言語内容統合学習（CLIL）や CBI（Content-Based Instruction）の潮流があり、外国語に直結する要素だけでなく、学習者の関心や専門を最大限に活かす学習活動を展開することが必要である。そこでニセコの観光資源の多様性の理解をとおり、第二言語習得に関する学習活動をデザインし、教育実践を通じて、教授設計を評価することを目的とする。具体については以下を想定する。

- ①日本人学生と留学生のチームで、ニセコ町の観光資源の多様性を調査する（まなざしの交換）
- ②調査の過程で、ICT ツールを活用しながら多言語を用いた異文化間コミュニケーションや資料作成を行う
- ③成果発表のための映像作品を制作する（音声または字幕による多言語対応）

1. 教授設計

1.1 授業のねらいと活動計画

2021（令和3）年度秋学期の2年演習（以下、ゼミ）及び修士論文指導演習の活動の一環として、ニセコ町の国際化と多言語活動の取り組みに関する現地調査を取り入れた（表1）。ゼミ全体の到達目標は、北海道の地域の魅力を伝えるための観光プロモーション動画の企画、制作、発信ができるようになることであった。そのため、プロの映像クリエイターをゲスト講師に迎えて4回の遠隔ゲストレクチャーを実施し、動画制作の基本、企画書の作成、テーマと全体構成の考え方、動画編集アプリの操作方法を学び、作品に対する講評を得て完成した作品を北海道主催の動画コンテストに応募した。修士論文指導では、現地観察調査、聞き取り調査、質的データ分析の実践を通じて研究手法を学ぶことをねらいとした。

2年ゼミ生の構成は、日本人3名（男3）とベトナム人5名（男2、女3）、修士論文指導演習の構成は、中国人3名（男1、女2）であった。

表1 秋学期2年ゼミの授業計画

時期	授業回	活動内容	参加者	授業形態
9月	1	ガイダンス	2年ゼミ生	対面
	2	ゲストレクチャー①映像制作の基本	2年ゼミ生	遠隔
10月	3	映像の企画（コンセプト、ターゲット、伝えたいこと、公開プラットフォーム、映像規格等）	2年ゼミ生	ハイブリッド
	4	ゲストレクチャー②企画書作成、テーマ決定、全体構成の検討	2年ゼミ生	ハイブリッド
	5	企画書の作成、ニセコ町事前学習（高橋牧場の6次産業経営について、国際交流員と図書館の多言語交流活動まとめ）	2年ゼミ生 + 修士院生	対面
	6	ニセコ町事前学習（グループ調査計画と行程表作成）	2年ゼミ生 + 修士院生	対面
	30日・ 31日	ニセコ町フィールドワーク1回目	2年ゼミ生 + 修士院生	対面
11月	7	ニセコ町事後学習（成果報告とまとめ）	2年ゼミ生	ハイブリッド
	8	ニセコ町事後学習（成果報告とまとめ）	2年ゼミ生	ハイブリッド
	13日	ニセコ町フィールドワーク2回目	修士院生	対面
	9	撮影した素材（写真・動画）の整理と共有	2年ゼミ生 + 修士院生	対面
	10	ゲストレクチャー③動画編集アプリの操作方法	2年ゼミ生	遠隔
12月	11	動画作成（シーン構成、画面効果、テロップ、字幕、BGMの追加等）	2年ゼミ生	遠隔
	12	動画作成（シーン構成、画面効果、テロップ、字幕、BGMの追加等）	2年ゼミ生	遠隔
	13	作品視聴、相互評価、修正コメントフィードバック	2年ゼミ生	遠隔
1月	14	作品視聴、相互評価、修正コメントフィードバック	2年ゼミ生	遠隔
	15	学年合同成果発表会 ゲストレクチャー④作品発表・講評会、最終修正	2年ゼミ生	遠隔

	16 臨時	コンテスト応募準備 (応募締切 1/31)	2年ゼミ生	遠隔
--	-------	-----------------------	-------	----

1.2 授業形態

過年度から続く新型コロナの感染拡大により、授業形態は対面、遠隔、ハイブリッドを適宜切り替えての実施となった。ゲストレクチャーの回は、講師が東京在住であるため遠隔授業を行い、学生は各自の自宅や大学の共用パソコン室から受講した。通常授業は、秋学期冒頭は対面授業でスタートしたものの、途中で遠隔授業に切り替えることとなった。対面授業の回も、体調不良を理由に遠隔受講を希望する者がいた場合にはハイブリッド授業とした。ニセコ町フィールドワークは2回とも、少人数であること、屋外や広い空間でソーシャルディスタンスを維持できる活動が中心であること、シーズンオフのスキー場隣接ホテル (LODGE MOIWA 834) を貸し切りにして宿泊できたこと等の条件を満たし、消毒、黙食、マスク着用などを周知徹底することで、対面で活動することができた。なお、10月～11月は学生の新型コロナワクチン接種時期であったため、日本人学生1名は出発日に副反応が強く出てしまい欠席した。

2. 調査の実施

2.1 行程

ニセコ町のフィールドワークは2回に分けて行った。1回目は10月30日(土)・31日(日)の1泊2日で、2年ゼミ生を中心に実施した。2回目は11月13日(土)の日帰りで、修士院生を中心に実施した。調査地と行程表は表2の通りである。1回目の移動手段は、大学バスが部活動等の利用で予約できなかったため、千歳相互観光バスを予約手配した。

表2 ニセコ町のフィールドワーク行程表（上：1回目、下：2回目）

行き先			ニセコ町現地調査 1泊 2日 (札幌国際大学奨励研究+2年ゼミ動画素材撮影)		引率教員:杉江聡子	携帯:090-6446-1684		
日	年月日	曜日	旅程					
1	10月30日	土	【行程】 札幌国際大学 ===== ニセコ着 ===== ミルク工房 ===== マンドリアーノ ===== ニセコ役場 =====					
			【時刻】 8:30集合/8:45出発 10:45 11:00~12:00 12:00~12:45 13:00~14:30					
			【備考】 1号館玄関集合 施設見学・聞き取り調査 昼食(ピザ・各自自由) 全体説明・国際交流員聞き取り等					
			【行程】 ===== ニセコ図書館あそぶっく ===== コンビニ立ち寄り ===== ホテルIN/ゼミ活動 ===== 甘露の森 ===== 自由行動・就寝					
			【時刻】 (徒歩移動) 14:40~16:10 16:30頃 17:00~18:00 18:00~19:30 19:30~					
2	10月31日	日	【行程】 ホテルOUT ===== ブリーフィング ===== グループ調査 ===== ニセコ駅集合 ===== 道の駅ニセコ					
			【時刻】 9:30 9:30~9:45 10:00~13:00 13:00 13:15~15:00					
			【備考】 朝食を済ませておく グループ調査行程確認等 2班に分かれて自由行動・昼食込 グループごと調査報告・買物					
			グループ調査【DUONG班】第二有島だちょう牧場→有島記念館→ニセコ駅 【貫太郎班】第二有島だちょう牧場→ニセコ駅周辺カフェ店舗調査					
			第二有島だちょう牧場 https://ostrichfarm.mystrikingly.com/ 〒048-1543 北海道虻田郡ニセコ町豊里239-2 電話090-8273-8324					
【行程】 ===== ニセコ残 ===== 札幌国際大学着・解散								
【時刻】 15:00 17:00頃								
【備考】								

曜日	旅程					
土	【行程】 真駒内駅 == ニセコ着・ニセコ道の駅 == ニセコワイナリー == ラジオニセコ == ニセコ残 == 真駒内駅着					
	【時刻】 8:45集合/9:00出発 11:00~12:00 12:30~14:30 14:45~15:45 16:00 18:00					
	【備考】 改札外集合 昼食 本間真由美様聞き取り調査 宮川様聞き取り調査					

学生らは全員、ニセコ町を訪れた経験がなく、ニセコ観光圏についても知識がなかったことから、全体調査で聞き取り調査やニセコの国際化と多言語活動について共通認識を得ることとした。その上で、動画の素材として自分たちの関心や魅力を感じるものを発見できるようグループ調査の時間も設定した。全体調査のための事前学習として、訪問地である高橋牧場ミルク工房、ニセコ町役場、図書館「あそぶっく」における国際化や多言語交流活動について、文献、WEBサイト情報、ニセコ町の広報資料などを調べてまとめた。また、各訪問地について教員が質問リストを作成し、それに関連して学生らの興味関心に基づく質問項目を追加した。質問リストは、教員が調査実施日の3~5程度前に各訪問地の担当者宛にメールで送信し、主な回答を想定してもらい、当日の聞き取り調査が円滑に進むよう配慮した。グループ調査にむけては、訪問地、調査目的、撮影素材、費用などを検討した行程表を作成すると共に、移動時の交通手段であるオンデマンドバスの予約などもグループごとに行った。

2.2 訪問地①高橋牧場

調査初日の最初の訪問地は高橋牧場ミルク村であった。到着後、ミルク工房の製品販売所、製造工場の一部などを見学しながら、高井氏より事業や商品の特徴などについて説明を受けた（図 1）。その後、学生らと共にゼミの事前学習で作成した質問リストに沿って、高井氏から回答や意見の聞き取りを行った。質問と回答の一部を抜粋し、表 3 に示す。

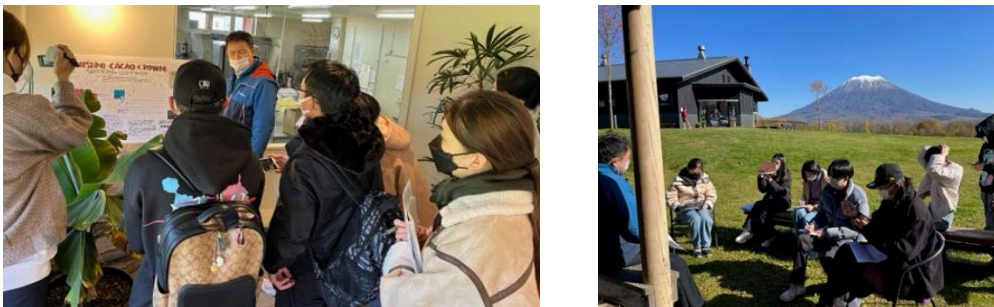


図 1 高橋牧場の施設見学と聞き取り調査

表 3 高橋牧場の聞き取り調査結果

学生からの質問	担当者からの回答
地元の農産物などを使った製品づくり商品作りにこだわるのは難しいと思います。例えば、その地域で取れるものも限られてくるし、その地域にあった製品・商品が作れるとも限らない点が難しいと感じます。その点について、コロナ前後で何か状況が変わったことはありますか。	できないものを無理にとは考えていません。例えば、ニセコはジャガイモの産地ですがジャガイモをアイスに入れることはありませんが、グラタンにするとおいしいですね。おいしいことが一番大事です。地域の産品に関して、コロナの状況で変わったことは大きくはないです。余市のブルーベリーなど、規格外品は在庫過剰のように聞いています。
事前学習をつうじて、自社生産の食材を用いたスイーツの開発や販売に力を入れていることを知りました。北海道の観光地などでソフトクリームは多いですが、例えば帯広など他の地域、他者製品、牧場 経営をしていない観光施設との違いや、こだわっているところ	「牧場が作ったから」という独りよがりこだわらず、愚直においしいものにこだわっていることと、他の牧場とは違う商品群を作るよう心掛けています。例えば、バームクーヘンやミルクチョコレートを作る牧場はありません。

などはありますか。	
ニセコは有名な国際観光地域ですが、コロナの影響により旅行者がいない期間、高橋牧場の事業や活動にどのような影響がありますか。	国際的といっても、外国人観光客は数字の捉え方にもよりますが実際は1/10です。
ミルク工房はニセコを旅行する旅行者の間で知名度が高く人気地域ですが、未来の高橋牧場は旅行業に参加する計画がありますか。	旅行業には主体的に参加する計画はありませんし、宿泊業も同じです。広く観光業においては同業者がいないから、応援してもらいやすいということも起こります。仮にみなさんが宿泊業をやっていたら、隣のホテルの宣伝はしないですよ？地域に応援してもらいやすい、というのも重要な要素だと考えています。
ニセコに住む外国人が多く、旅行開放後はさらに世界の旅行者が訪れていますが、高橋牧場には現在、外国人従業員がいますか？ いる場合:どんなメリットと不便点がありますか。近い将来、外国人従業員を受け入れ、国際化していくことを考えていますか。	牧場には常時外国人実習生がいて、店舗の方にも2年に1人くらいいます。我々の店舗で働きたい外国人の方の多くは、外国人の少ないところで働いて、日本語を学びたいという意欲のある方が多いため、大きな不便はありません。働き方への考え方の違いはありますが、そもそも移住者が多いエリアなので、個人差ともとれる範囲です。

調査後はピザショップマンドリアーノで昼食を取り、羊蹄山の美しい景観を楽しみながら、高井氏からお話しいただいた乳製品とチーズ作りのこだわりや品質の高さを実感した。一般利用客は日本人だけでなく、ニセコの地元の外国人ファミリーの姿もあり、国際化するニセコの観光地の実態を観察することができた(図2)。

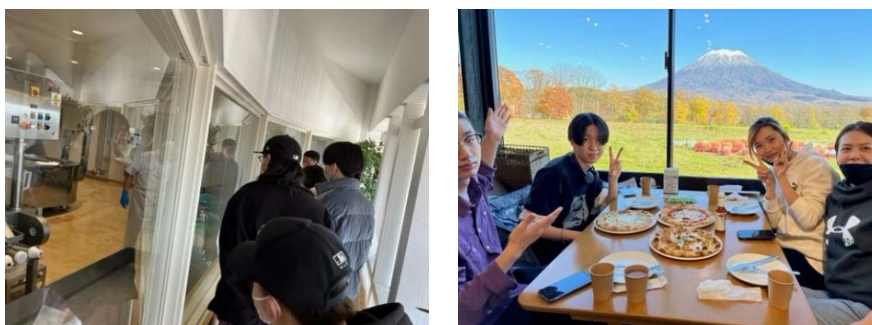


図2 ピザマンドリアーノのチーズ工房と昼食風景

2.3 訪問地②ニセコ町役場での国際交流員との意見交換

ニセコ役場新棟のホールで、片岡教育長、教育委員の越湖氏、国際交流員2名（ミッチェル・ラング氏、梅冠男氏）からの聞き取りを行った（図3）。ニセコの多文化共生を意識した行政計画のポイント、ニセコ町が目指す英語教育と子ども像と取り組み、ニセコの外国人移住の推移、国際交流員が中心となって運営する外国語講座や異文化紹介イベント、住民と共に活動するニセコ観光圏の観光イベントなどについて、事例に基づき様々な情報を紹介いただいた。特にコロナ禍で運営に苦労した住民向けオンライン外国語講座や、異文化紹介イベントの活動制限によるラジオ放送への変更など、大学における教育・学習活動に共通する内容もあり、学生らも興味深く耳を傾けていた。国際交流員の2人はもともと留学生として日本に来たという経緯があり、異文化理解やコミュニティへの適応の困難やトラブルについては、ゼミ生や院生も同じ留学生という立場から共感するところが多くあったようである。教育委員の越湖氏からは、「放課後子ども教室」という教育政策の主導ではじまった住民参加の異文化交流活動についての経緯についてご紹介いただいた。ニセコの国際化の進展に伴い、地域の人々が日常生活の場面どのように異文化理解や外国語コミュニケーションを受容していったかについて具体的にお話をうかがうことができた。ここでも、事前に学生が作成した質問に基づき質疑応答を行った。質問と回答の抜粋を表4に示す。

表4 国際交流員との意見交換会 質疑応答

学生からの質問	担当者からの回答
世界各国からの人たちと交流して、勉強に	ミッチェル氏：外国人同士だったら繋がりがやすい。コミュニティができやすい。ニセコ町に住んでいる外国人の国籍はさまざまだが、どこの国の人でも友だちが欲しい。だからニセコに来てすぐつなが

<p>なったことは何ですか。</p> <p>その経験から、ご自身の性格と考え方が変わった実感がありますか。</p> <p>どのような変化があったと思いますか。</p>	<p>って、便利になった。母国語が違って、国籍が違って、そんなに違いは多いわけじゃないから、友だちになりやすいと気付いた。自分の性格はそんなに変わっていないと思うが…例えば今まで接触の機会がない国の人たち、例えば中国人には本当に会ったことがなかった。ニセコ来るまでは。あとアジア人もいろんな国々の人に会った。今までに会ったことがない国籍の人だから、世界について知っていることが広がった。(梅氏に問いかけて)私の性格は変わった？</p> <p>梅氏:(ミッチェル氏の正確は)ちょっと変わったと思う。性格の変化というより人の成長。私だったらやっぱり、今まで留学生の時代からずっと日本に来て、ある程度日本の考え方になじめている。ニセコに来て、ここは外国人いっぱいいて、日本の常識は海外の人にとってそうじゃない。でも、それは間違っていない。とすごく感じている。いろんな価値観を持つてる人たちと出会うことで自分も世界が広がっている感じ。寛容性を持つようになった。自分が必ず合っていると思っても、相手にとって必ず合っているわけではなく。そういうようなことを寛容することで、もっと相手を理解できるようになる。</p>
<p>コロナが終わったら、あるいは日本のコロナの感染状況がだんだんよくなってきたら、ニセコはどのようなになってほしいですか。</p> <p>国際交流員の活動として、ニセコの中の人、外の人たちと</p>	<p>ミッチェル氏:少なくともコロナが終わったら、コロナ前と同じ状況になってもらいたい。いつも通りのニセコ町になって戻ればいいなあとと思う。僕は2017にニセコ町に来たが、ちょうどブームになっていて、観光客が一番多い時期で、そのニセコしか知らない。コロナになっていきなり観光客が来なくて、またもとのニセコになれば嬉しい。もう少し長い目で考えてみると、そのあとのニセコ、今は持続可能な目的=SDGsにニセコ町は力を入れている。2050年、2100年になってもニセコはまだ持続可能な街になっているととてもいい。今のニセコ町はそのような未来性を考えながら行政企画してみると聞いた。とてもいいと思うし、実現していけばいいなあとと思う。</p> <p>梅氏:持続可能な都市、ニセコのこれからの目標の中に、高い質の教育。そういうふうに私たちの仕事も結構関わっているのかなと思う。やっぱりコロナの影響で、学校に行くときも子どもたちとの接</p>

<p>どのように交流していきたいですか。</p>	<p>触ができなくなって、いろんなことができなくなっている。特にインターナショナルスクールとも交流がほぼゼロ状態。もしコロナのあと、ここに住んでいる日本人の子どもたちに、もっと英語に触れ合ってもらって、ここに住んでる外国人の友だちや子どもたちにもっと日本語を少しでも教えたい。そういうイベントができたらいいい。さっき話した English Tour もコロナの関係でできなくなった。もし来年とか少しずつそういうような制限が解消されたら、子育てに関係あるイベントを企画したい。</p>
--------------------------	---



図3 ニセコ町の国際交流員との意見交換会の様子

2.4 訪問地③図書館「あそぶっく」

ニセコ町役場の向かいには図書館「あそぶっく」があり、多言語絵本を数多く収蔵している（図4）。小規模ながらも、日本人にも読み聞かせなどでなじみのある絵本の多言語版があり、例えば、「ぐりとぐら」シリーズや「はらぺこあおむし」など、日本語とは異なる文字や音で構成される絵本の魅力を垣間見ることができた。学生らは世界の多言語絵本コーナーを中心に施設内を自由に見学した後、職員の方に聞き取り調査を行った。施設の管理体制の変更により、従来の図書の配架とは異なる、多国籍な住民や訪問者のための多言語絵本を媒体として、利用者目線でより使いやすく魅力あるものにするための工夫についてお話をうかがった。インターナショナルスクールとの連携、国際交流員と共同で実施する多言語読み聞かせイベント、生涯教育と異文化理解を組み合わせた企画など、ボランティア精神と事業化の葛藤など、現場の様々な工夫と共に、今後の発展の方向性が期待される話を聞くことができた。



図4 図書館「あそぶっく」施設見学の様子

初日の調査は以上で完了し、宿泊施設「LODGE MOIWA 834」(図5)へ移動した。オフシーズンのスキー場ロッジ併設ホテルを貸切で利用することができたため、学生らのコロナ対策も適切にコントロールすることができた。夕食及び朝食は、レストランなどでの食事はとらず、チェックイン前にコンビニで食料を調達し、ホテルのロビーで飲食した。学生らは初めてカプセルホテルに宿泊した者も多く、フロアやユニットに分かれた二段ベッドに宿泊し、修学旅行のような雰囲気を楽しんでいた。夕食後にロビーに集合し、初日の調査まとめと感想をシェアする報告会を行った。事前学習だけからはわからない、具体的で詳しい現場の様子に触れ、日本人も留学生もそれぞれ印象深かった点などを語り合い、共有した。



図5 LODGE MOIWA 834 の外観とカプセルベッド

2.5 学生主体のグループ調査

調査2日目は学生主体のグループ調査を行った(図6)。留学生のみのグループには教員が同行し、日本人を含むグループはリーダー学生主導で、異動や訪問地を決め、小さな旅を通じてニセコの魅力を体験すると共に、動画の素材を集めた。ニセコ町内では、

ニセコバスが運航しているオンデマンドバスのサービスがあり、乗車地、目的地、人数を事前予約して、既定の運賃でドアツードアの移動が可能である。教員同行のグループは全体移動と同じ大型バスに乗車したが、学生のみグループはうまくニコットバスを利用して、有島第二ダチョウ牧場、野菜カフェ、ニセコ駅へと移動していた。昼食はグループごとに食事場所を決めて取ることにしたが、それぞれニセコの地元の野菜や食材を使った料理を味わうことができたようである。

ダチョウ牧場では、和牛とダチョウの混合飼育と SDGs に配慮した畜産・観光施設の経営についてのお話を聞くことができた。有島武郎記念館では、ニセコの開拓と有島の農地解放、相互扶助や住民参加という現代のニセコに継承されている開拓史精神の一面を学ぶことができた。ちょうど黒百合会の展示会が同時開催されており、留学生にとっては日本の学生の美術作品を見る機会は珍しかったようで、時間をかけて鑑賞し、写真撮影するなど熱心に観覧していた。

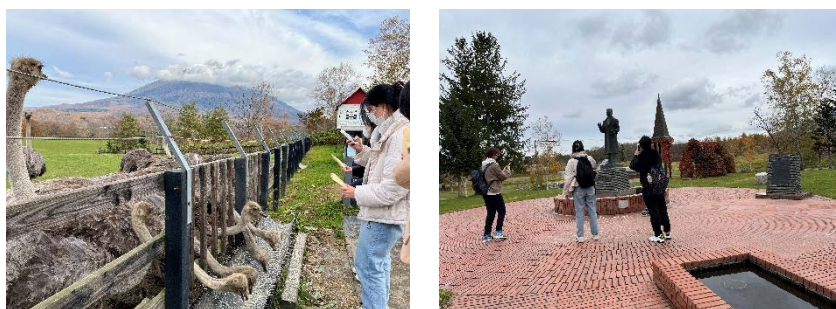


図6 第2有島牧場のダチョウの餌やりと有島武郎記念館見学

グループ調査後はニセコ駅に集合し、全体でニセコの道の駅「ニセコビュープラザ」衣斐動詞、ニセコの食材や加工品、土産品探しと多言語標識の調査を行った。ちょうどハロウィンの時期だったため、町民が装飾したという美しいオレンジ色のカボチャで作られたジャックオーランタンが各所に見られた。大学生にとっては、まさに SNS 映えする秋のニセコの観光景観を体験することができた(図7)。2年ゼミと大学院生合同で実施した調査1回目の報告は以上である。



図7 ニセコ駅とニセコビュープラザのハロウィン飾り

2.6 訪問地④多言語絵本読み聞かせ（ニセコワイナリー）

10月にスケジュールが合わなかった訪問地について、11月13日（土）日帰りで追加調査を行った。ニセコワイナリーのほんままゆみ氏（以下、まゆみ氏）は絵本作家でもあり、ご主人のライフワークとしてワイン作り、ご本人のライフワークは絵本を通じたコミュニティ作りである。ワイナリーの一室に世界中のさまざまな絵本が展示されており、文庫ライブラリーとして公開されている。近隣の子どもたちはもちろんのこと、ワイン観光に来たファミリーの子どもたちが絵本を読んで楽しみながら待つこともできる。国際交流員と共同で異文化理解イベントや多言語絵本読み聞かせイベントなどを定期的実施しており、10月の調査で訪れた図書館「あそぶっく」や教育関係者とも連携して活動している。

札幌出身であるまゆみ氏は、自身の人生の中で、メディアの仕事から家族の仕事による海外生活、その中での育児や絵本を通じた子育て支援のボランティア、帰国後も継続した海外と日本をつなぐ絵本作家活動などについて、生き生きと語ってくださった。自身の関心や得意とする分野、コミュニティの中での交流を通じた人のつながり、絆からつながる絵本やニセコのワイン作りに向けた新しい挑戦という展開、夫婦のライフワークが別々の分野でありながら相乗効果を生むというダイナミクスは、まさに多文化、多言語を背景とする人々のコミュニケーションを通じた共生社会のありようを反映していた。

調査に同行した院生らは、手分けしてインタビューしながら、記録を撮影した。事前に質問リストを用意したが、まゆみ氏は事前に目を通し、それに沿ってナラティブを語ってくださったため、質疑応答というよりは、日本語の講話を聴くような形となった。文庫に展示されている中国語の絵本や、日本語に訳された中華文化紹介の絵本などを手に取り、子供向けのひらがなの本は逆に読むのが難しい、など言語習得の過程についても考える機会を得た（図8）。



図8 ニセコワイナリーの多言語絵本文庫ライブラリーとインタビューの様子

2.7 訪問地⑤ラジオニセコ

ニセコワイナリーの次にラジオニセコを訪問した。ラジオニセコの設立の沿革や事業概要について説明を受けた後、事前に作成した質問リストに沿って、放送局長の宮川博之氏から聞き取りを行った。国際色豊かなパーソナリティや番組編成について、日本のラジオ局の運営の仕組み、メインの視聴者層や観光客向け番組について、ニセコの観光に関する番組と多言語対応の有無、インバウンド最盛期とコロナ後で変わったこと、特に異文化理解や多言語交流を意識した番組があるか、今後の展望などについて丁寧にご回答いただいた。調査に参加した院生は、中国の放送局の運営や事業、ラジオリスナー層や聞くタイミングなどの違いについて質問し、日中両国のメディア特性の相違、地域に根差して、「住民参加」と「情報共有」を理念とするラジオニセコの方針について、行政、事業主体、地域と住民の関係任官する気づきを得たようであった。質問と回答の一部を抜粋し、表5に示す。

表5 ラジオニセコのインタビュー内容

学生からの質問	担当者からの回答
ラジオニセコのFacebookやWebサイト、ラジオニセコ通信などによると、かなり国際色豊かなパーソナリティや番組編成	(ラジオ局の設立の経緯というのは企業概要で説明あり) 設立当初のラジオ放送はパーソナリティ2人しかいなかった。朝夕の番組、平日2つだった。ラジオ未経験の自分と役場の職員、2人でスタートした。その時にいろんな町民パーソナリティ(ボランティアのパーソナリティ)が当時20人。その20人も自分たちの番組に出てもらい知り合ったことをき

<p>ですが、ラジオ局設立の経緯や設立当初のラジオ放送の様子などを教えていただけますか。</p>	<p>っかけにラジオが好きな人を集めて、そのメンバーと一緒に2人がやってた放送局。徐々にやっているうちに広告収入も増え、スタッフも増えて、今の4人になった。設立当初は町民は「何でラジオ局を作ったんだ」「なんで中央のこの駅前にラジオ局を作ったのか」という、どちらかというアゲインストの風が吹いていた。(9月の)ブラックアウトの大きな影響だと思うが、最近は「ラジオニセコを4人より少なくしちゃダメ」という声が町民から出ている。「町はもっと応援しなさい」という話が出ている。</p>
<p>メインリスナーはニセコ住民ですか。観光客も意識されている番組はありますか・インバウンドや国・地域別に特にターゲットをしぼって情報を提供するなどする番組もありますか。</p>	<p>メインリスナーはニセコ住民。ただニセコ町ではなくニセコエリア、倶知安町の人などもいる。もっと広く聞こえるようにしようとしてニセコ町でも動いている。広く聞こえるようにするのにお金が必要であれば協力するという企業もいる。ただインターネットリスナーもいて割合まではわからないが、いろんところで聴いてくださっている方がいる。スマホアプリで聴いているラジオニセコの登録者は数がわかる。1400人くらい登録している。住民も農業をされている方はトラクターやビニールハウスの中とか倉庫でもラジオをかけて聞いている。農家の方に会うと「朝5時くらいから生放送をやらない？」って言われる。みんな夏場は5時から仕事してるから。「ごめんなさい」って言ってます(笑)夜も7時から放送はしてる。去年までは観光客を意識した番組を週末に放送していた。今は土曜の朝7時から10時までの番組に新しく作ったコーナーとして30分だけ観光客への情報発信をしている。観光客はやはり遠くで聞かなきゃならないので、どちらかというインターネットで情報収集する人も多い。ラジオニセコのFacebookなどにはニセコ町でないイベントとかをどんどん発信している。取材に行ったときの取材の様子など。例えば今朝、緑茶屋さんのマルシェだとか観光名所へ行ったら観光名所のものをホームページに載せて、そちらをご覧くださいと紹介している。</p>

3. 授業実践の成果

3.1 2年ゼミ学年合同成果発表

秋学期授業の最終回に学年合同成果発表会を実施した。新型コロナの蔓延状況に配慮し、オンライン発表会となった。ベトナム人学生と日本人学生が代表でゼミの学習成果をまとめたスライドを作成し、日本語で口頭発表を行うと共に、クラスメートが制作した動画作品の一部を紹介した（図9）。



図9 学年合同成果発表のスライド

3.2 動画作品

学生らの動画企画のコンセプトは、多くが日本、北海道を知らない世界や母国の人々にニセコの魅力を伝えたい、というものであった。そのため、英語のテロップを入れたもの、テキストを少なくして映像、ビジュアル素材、音楽を中心に用いたものなど多彩な表現手法が用いられた。留学生は、日本での留学生生活を母国の両親や友人たちに見せたいという意向もあり、日本語を用いた動画作品もあった。それぞれがニセコ町のフィールドワーク、国際協同学習の様子や成果を個性豊かな作品としてまとめ上げ、学修の成

果物として完成させた（図 10）。



図 10 学生による動画作品（Youtube 限定公開）

3.3 学習者視点の成果の認識

動画制作の過程で、2年ゼミ生の動画作品について、一緒にフィールドワークに行った修士院生と改善の意見交換を行う課外活動の機会があった。その際、今回の国際協同学習の成果について聞き取りを行ったところ、次のような成果の認識が報告された。

2年ゼミ生 D：Y先輩と Z先輩の意見を通じて詳しく有島武郎の思想とかわかってきました。さらに、高橋牧場の写真を追加してもらって自分のビデオの内容が良くなったと感じました。日本語で他の留学生と意見交換する時、時々お互いに相手の意見わからなくて、自分の意見も伝わらないこともあります。一方、日本人の前にしゃべる時ドキドキするじゃなくて、お互いに留学生だから楽しめます。日本語より英語得意人もいるから、伝えないことを他の言語を挟めたらいいと思います。その他、自分もよく使う「武器」は body language です。言語より感情がよく伝わると感じます。

院生 C：Dさんの動画に関する意見交換について、お互いにとって有益な学習や交流の

やり方だと思う。自分はニセコ町のフィールドワーク1回目には参加しなかったが、Dさんの動画を見たり意見交換したりすることを通じて、間接的にニセコの風景を楽しむことができたし、様々な情報を得ることができた。

コミュニケーションについては、お互いに日本語の母語話者ではないので、言いたいことと聞き取って理解できることのレベルが足りないと感じた。また、異文化交流では、より相手の言っていることを理解するために、お互いの国の文化や価値観を知る必要がある。

学年や国籍が異なる学生の交流活動はとてもいいと思う。自分の知識を増やしたり、交流したりしながら自分の足りないところにも気付ける。特に留学生にとってはとても有益な学び方だと思う。

院生 Y：TikTok を使って動画編集していたが、ライフスタイルを記録するタイプの動画でとても良い感じ。コミュニケーションについては語彙量の問題。キーワードが言葉で出てこないのを内容を説明してわかってもらう必要がある。人によって考え方が違うので、どうしたいかについて好みも異なる。

院生 Z：動画の内容は豊富だったが、伝えたいことを編集効果（エフェクト等）を使って表現するのはとても難しい。学年は違っても一緒に同じ場所を調査し、各自が必要だと思う観点から調査し、結果を伝え合い、自分が気付かなかった色々な成果を得られたのが最も良いところ。言語コミュニケーションについては、自分が感じていることの説明が単純すぎて、自分の気持ちを完全に詳しく表現できなかった。

3.4 教授設計としての評価

学年や国籍を横断した国際協同学習のグループ構成であり、同じフィールドを調査しても、多様な問題意識、価値観、視点から様々な発見があり、それらを共有することで、創造的な学び合いが実現した。留学生の日本語レベルは差が大きかったが、会話能力が高い者が積極的にリードして、全体のコミュニケーションが円滑に進んでいたように見受けられた。グループ調査計画や事前学習の報告では、先輩にあたる大学院生が2年生らをうまくサポートし、現地問い合わせや行程表の詳細を検討する際に足場架けが成立していた。動画制作の過程でも、修士論文のテーマとして観光プロモーション動画を扱った院生が、構成の修正やエフェクト表現について助言するなどして、成果物のブラッシュアップが実現していた（図 11）。



図 11 動画の改善に向けた話し合いの様子（ベトナム人と中国人）

教授設計上の課題としては、対面、遠隔、ハイブリッドそれぞれの形態で、最適な活動や不向きな活動を適切に配置、設計することが挙げられる。観光学部の学びでは、集団でフィールドに出て、共同で活動や交流を行う学習体験の価値が大きい。新型コロナでこのような従来の活動方式に制限がかかる中、テクノロジーを活用するなど代替手段を講じて、個人による活動、少人数での活動、集団での活動を分類し、到達目標、タスク、方略、評価などの教授設計を最適化する必要がある。今後は、個人で観光地やフィールドの景観について観察、記録し、それらの素材を用いてバーチャルツアーと観光ガイドの交流活動を行うことを計画している。VUCA の時代に、観光、メディア、外国語教育を統合した新たな教授設計を開発し、魅力ある教育実践の選択肢を増やしていきたい。

謝辞

ニセコ町のフィールドワーク実施にあたり、資料提供、施設見学・利用、説明ご対応などをご快諾くださいました、ニセコ町教育長の片岡辰三様、同町教育委員の越湖明美様、国際交流員のミッチェル・ラング様と梅冠男様、高橋牧場ミルク工房の高井啓様、ニセコワイナリーの本間眞由美様、ラジオニセコ放送局放送局長の宮川博之様、モイワリゾートオペレーション合同会社（LODGE MOIWA 834）の長島佳純様、その他各施設従業員やスタッフの皆様に心より深謝申し上げます。

III 成果と課題

本調査研究をとおり、以下の成果を見ることができた。

1. ニセコ地域の発酵文化に関する現状把握とニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げ支援
2. 北海道におけるアウトドア事業の現状把握、とくにカヌープログラムを対象としたアイヌ民俗文化との親和性
3. ニセコの魅力をテーマとした動画制作をとおした地域資源の多様性の把握、あるいはそれをとおした学習手法の検討

また、今後の課題としては、全体としては、ニセコ町との連携協定書に掲げる次の事項を達成するためには、さらなる研究の深化と、ニセコ町および学生との協働による取り組みの展開等が重要である。

- (1) 人材育成や教育・研究などの交流連携に関する事項
- (2) 人的・知的・物的資源の相互活用に関する事項
- (3) ニセコ町の産業・文化の振興、まちづくりのための連携・協力に関する事項
- (4) ニセコ町における諸課題解決に向けた政策の共同研究に関する事項

また本研究においては、とくに食文化、アウトドア事業、言語内容統合学習というテーマを設定し、専門性をもつ教員各自の企画実施により具体的な取り組みを展開した。

各テーマにおける今後の課題をまとめると以下のとおりである。

(食文化)

ニセコの発酵文化について、なぜ発酵文化がこれだけ展開しているのか、郷土食としての現状や課題の把握など、より深掘りすること。また、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の活動支援のために、それらの情報を共有、活動への活かし方についても一緒に検討すること。さらに発酵文化以外のニセコ地域の食文化についても明らかにすること。

(アウトドア事業)

アイヌ民族やアウトドアガイド事業者等が連携し意味のあるトレーニングを行える体制を構築すること。今回のインタビュー等で得た知見を活用した推進体制を検討すること。「地域の伝統的な文化」「コミュニティ」「ガイド育成」という視点を組み合わせ

たプログラムを実施すること。

(言語内容統合学習)

個人で観光地やフィールドの景観について観察、記録し、それらの素材を用いてバーチャルツーリズムと観光ガイドの交流活動を行うこと。VUCAの時代に、観光、メディア、外国語教育を統合した新たな教授設計を開発し、魅力ある教育実践の選択肢を増やすこと。